

## I 研究主題

**ひゅうが学校教育プランに基づく小中一貫教育の推進**  
～義務教育9年間の連続したきめ細かな指導を通して～

## II 主題設定の理由

日向市では、学校教育推進のための基本方針として、「ひゅうが学校教育プラン」を策定して「学力向上、豊かな心の育成、体力向上、ふるさと教育、体験活動、食に関する指導」を推進することを宣言し、その主たる方策として、小中一貫教育の推進に努めてきている。

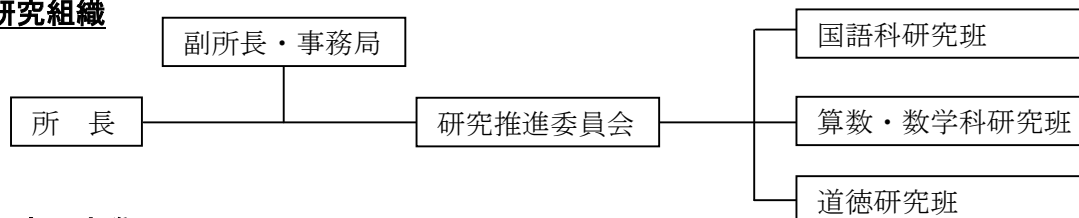
平成19・20年度は、研究テーマを「ひゅうが学校教育プランに基づく小中一貫教育の推進」と設定し、義務教育9年間を見通した教育課程の工夫など、ソフト面の連携システムの開発を通して日向市全体における小中一貫教育の普及推進に努めてきている。特に昨年度は、国語科、算数・数学科、道徳、ふるさとの時間、英会話科及び連携システムの推進の在り方について、「ひゅうが学校教育プラン～推進の手引き～」を作成したところである。

本年度は、2年間で構築した小中一貫教育のシステムの検証のための授業研究を中心とした実践的な研究に取り組むこととした。

## III 研究仮説

国語、算数・数学、道徳における義務教育9年間を見通した連続性・接続性のある学習指導方法を研究すれば、市教育施策「ひゅうが学校教育プラン」に基づく小中一貫教育を推進していくことができるであろう。

## IV 研究組織



## V 研究の実際

### 1 国語科研究班

これまでの「全国学力・学習状況調査」の結果から、本市児童生徒が「自分の考えを明確にし、話し合ったり、文章にまとめたりする力が不足している」という実態が明らかになった。そこで、児童生徒に論理的な読解力・表現力を身に付けさせる必要があると考え、研究の主題・副題を以下のように設定した。

#### (1) 研究主題及び副題

**論理的な読解力・表現力を育てる国語科指導の在り方**  
～説明的な文章の読解指導の工夫を通して～

#### (2) 研究の仮説

説明的な文章の指導において、教材分析の充実を図り、思考を深める発問の工夫、書く活動の計画的な位置付け、話し合い活動の充実などを行えば、児童生徒は、論理的な読解力・表現力を身に付けることができるであろう。

### (3) 研究内容

- ア 教材分析の充実
- イ 思考を深める発問の工夫
- ウ 書く活動の計画的位置付け
- エ 話し合い活動の充実

### (4) 研究の実際

#### ア 教材分析の充実

説明的な文章の指導においては、教材文の文章構成や指導すべき言語事項などを指導者がきちんと捉えておく必要がある。言語に着目し、かつ焦点化された指導を行うためにも、教材分析を充実させることは必要不可欠なものである。そこで、以下の観点と要素に沿って教材分析を行い、教材分析表にまとめた。

観 点	要 素
文 章 構 成	・形式段落 ・意味段落 ・要旨 ・相互関係 ・文章構成図
言 語 事 項	・重要語句 ・難語句 ・文法
指導上の留意点	・読解に必要な手立て ・児童生徒への支援

#### イ 思考を深める発問の工夫

これまでの説明的な文章の指導においては、内容や説明方法について確認するための発問が多かった。確認のための発問は、情報を取り出すために必要である。しかし、このような発問だけでは、深まりのある読みにならず、論理的読解力・表現力は育ちにくい。発問は児童の思考活動に刺激を与え、新たな発見を誘うものでなければならない。そこで、発問を以下の2つに分類し、学習の目標に応じて指導計画に位置付けた。

##### (ア) 確認のための発問

何がどのように書かれているかを問う発問で、教材文の内容や説明方法を確認するために行う。

##### (イ) 思考を深めるための発問

教材文の構造や表現方法、筆者の意図を問うための発問で、学習の目標に迫るために行うことが多い。叙述に即しながら根拠を明らかにした上で、総合的に考えなければならないので、深い読み取りを必要とする。

類 型	発 問 の 具 体 例 (東書5年森林のおくりもの)
確認のための発問	・この文章はいくつの形式段落から成り立っていますか。 ・ヒノキには、どのような性質があり、何に使われていますか。 ・木の、木材以外の使われ方には何がありますか。
思考を深めるための発問	・筆者はなぜ、このような題名を付けたのでしょうか。 ・筆者はなぜ、木に対して人間につかうような言葉をつかっているのでしょうか。 ・読み手にわかりやすいように、筆者が用いている述べ方の工夫はどんなところですか。

ウ 書く活動の計画的位置付け

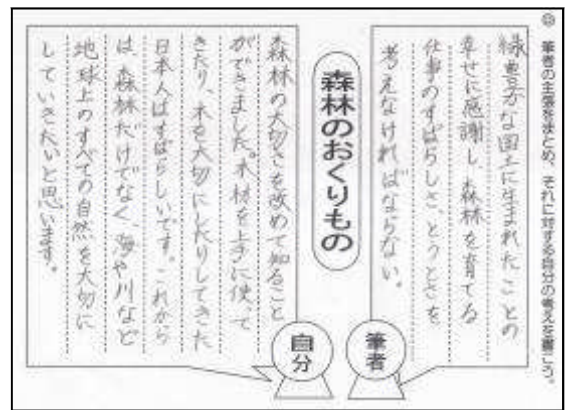
書く活動は、言葉の選択や推敲、文章の構成など、その活動自体が思考を伴うものである。書くことによって対象についてよく考え、それを整理し明確にすることができる。書く活動の目的とそれを達成するための方法をまとめ、指導計画に位置付けた。

(ア) 書く活動の目的と方法

目的	目的を達成するための方法
情報の取り出し	・サイドライン ・記号化 ・枠囲み ・書き抜き ・表
考えの明確化	・感想 ・要約 ・吹き出し ・文図
学びの確かめ	・感想 ・書き替え

(イ) 書く活動の例

名前	性別	年齢	使用材
スギ	男	10	柱、天、うぐいす
ケヤキ	女	10	酒、おもり、げた
ヒノキ	男	10	神社やお寺、りまな建物
ケヤキ	女	10	大黒柱、さねうす、しんげい
カラマツ	女	10	たんす、机
マツ	男	10	水車、橋
ケヤキ	女	10	船
スギ	男	10	土管、おもり、たんす
スギ	女	10	土管、おもり、たんす



【木材の性質・用途をまとめた表】

【筆者の主張や児童の考えを書いた吹き出し】

エ 話し合い活動の充実

私たちは、話し合いにより互いの共通点や相違点を知り、ものごとを決めたり知識を広げたりすることができる。国語科の学習においても、友だちとの意見を交流させる中で、自分一人では思いつかないような多様な考えに触れたり、また話し合いから新たな自分の考えを再構築したりすることができる。

(ア) 話し合いの視点や意図

視点	意図	子どもの姿
目的の明確化	同じ問題意識や課題意識をもって、互いに協力しながら目的（課題）に向かって話し合う。	課題に対して、「私は～です。」と発言する。
相手の尊重	相手の意図を考えながら、受容的に聞く。聞き手の反応を踏まえながら、分かりやすく話す。	うなずきや相づち、首かしげやつぶやきで反応する。
根拠の明確化	発言の際には、必ず叙述に即しながら、考えの根拠を明らかにさせる。	自分の意見に対する理由付けをしっかりとる。
考えの比較（練り合い）	自分の考えを述べるだけでなく、友達の内容に対する意見も述べるようにする。自分と友達の意見を比較し、共通点と相違点などを明確にしながら話し合う。	〇〇さんの意見に似ていて、私は～思います。 〇〇さんと違って、私は～ 생각합니다（考えます）。
考えの再構築	話し合いの過程を振り返りながら、自分の考えを再び考え直してみる。	～だと思っていたけれど、考えが一に変わりました。

#### (4) 話合いの例

以下は、第5学年「森林のおくりもの」における、「筆者が木に対して、人間に対してつかうような言葉をつかっているのはなぜか」の発問を受けての話合いの様子である。

C1：木も生きているから、人と同じような言葉をつかったと思います。  
C2：わたしも同じで、木も人間みたいに呼吸しているからだと思います。  
C3：まるで、人間のように木が元にもどっているからです。  
T：生きていることだけを表現するのであれば、あえて人間のように扱わなくてもいいのではないのでしょうか。  
C4：ぼくは、自分たちがお世話になっている木が普段の生活に欠かせない物だから、人と同じような言葉をつかったと思います。  
C5：筆者の富山さんは、この世界に何億人という人と同じように、森林も人類の一人だと考えたから、「若々しい」などの言葉をつかったのだと思います。  
C2：わたしも、筆者の考えが含まれているような気がしてきました。  
C6：富山和子さんは、「木は生きているから、もっと森林を大切に。」ということ伝えるために、人間につかうような言葉をつかったのだと思います。  
(以下省略)

始めは、「生きているから擬人的な表現を用いている」という表面的な読み取りをしている児童が多かったが、話合いを通して筆者の意図や主張に関わる述べ方の工夫にまで考えを深めることができた。

#### (5) 成果と課題

- 教材分析を充実させ発問を工夫したことにより児童生徒が、論理的な読解力・表現力へとつながる深い読み取りを行うようになった。
- 目的を明確に書く活動を位置付け、それをもとに話合い活動を設けたことで、児童生徒の意見交換が活発になり、多様な考えを導き出すことができるようになった。
- 本時目標に即した思考を深めるための発問について、さらに研究していく必要がある。
- 話合い活動により導き出された多様な考えを、より深い読み取りへと高めるための練り合いや考えの再構築の場の設定について、さらに研究を深めていく必要がある。

## 2 算数・数学科研究班

これまでの「全国学力・学習状況調査」の結果から、本市児童生徒は、「様々な条件を整理しながら、問題を解決する力」を伸ばす必要があることが分かった。そのためには、「見通しをもち、筋道を立てて考える力（算数・数学の力）」を育成する必要がある。本研究では導入、展開、終末の各段階において、児童生徒が見通しをもちながら学習することにより、その力を育成しようと考えた。

そこで、「見通し」という言葉を、次ページの図1のように、学習課題の把握や学習課題の解決、本時の学習内容から今後の学習内容へのつながりに至るまでの「過程」ととらえ、生徒に見通しをもたせるための手立てや学習指導法の研究を進めることとした。

(1) 研究主題及び副題

**算数・数学の力を身に付けた児童生徒の育成**  
～見通しをもたせる学習指導法の工夫を通して～

(2) 研究の仮説

系統性を意識した指導方法の工夫や一単位時間の各段階で、児童生徒に見通しをもたせるための学習指導過程の工夫を行えば、算数・数学の力を身に付けた児童生徒を育成することができるであろう。

(3) 研究内容

- ア 系統性を意識した指導方法の工夫
- イ 一単位時間における学習指導過程の工夫

(4) 研究の実際

- ア 系統性を意識した指導方法の工夫

(ア) 単元系統表の活用

義務教育9年間の系統性や連続性を意識した指導を行うために、領域ごとに義務教育9年間の学習内容を示した単元系統表を活用した。

系統表の活用例①

小学校第3学年の「表とグラフ」の学習では、単元の見通しをもたせるために、小学校第2学年で学習した「ひょう」を導入として取り上げた。マーク●による表記のよさや学級でのアンケートの集計に生かすこともできることを知らせた。

系統表の活用例②

中学校第1学年の「比例と反比例」の学習では、比例のグラフを理解させるために、小学校第6学年で学習したグラフが第1象限に表されること、負の数の導入によりグラフの範囲が広がること、曲線としてのグラフの存在もあることを紹介しながら式、対応表、グラフなど多面的な方向から理解を促した。

(イ) ステップアップ問題集の活用

レディネスの確認、補充学習、本時の学習の定着などに使用できるステップアップ問題集を活用した。これも義務教育9年間の連続した指導を行うために作成された問題集であり、小学校第5学年～中学校第1学年までの全小単元に対応している。

ステップアップ問題集の活用例

小学校第6学年の「比例」の学習において、小学校第4学年で学習した「変わり方」の折れ線グラフのかき方を導入に使った。比例のグラフをスムーズにかくことができ、学習のめあての「比例のグラフが正しくかけるようになるろう」を十分に達成することができた。この問題集には、中学校へつながるチャレンジ問題が掲載されているので、児童に単元の系統性を意識させることができる。

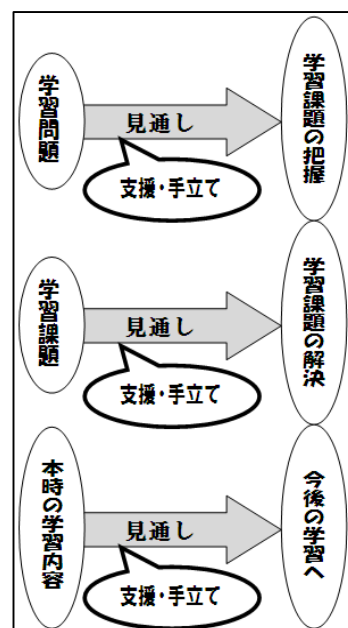


図1 【見通しのとらえ方】

イ 一単位時間における学習指導過程の工夫

(ア) 導入段階～「課題把握への見通し」をもたせるための手立て

児童生徒に学習課題をつかませるために、学習問題への表記を工夫したり、単元系統表やステップアップ問題集を活用したりしながら、課題把握への見通しをもたせた。

a 学習課題の提示の仕方

- 思考・判断を身につけさせたい → ～を考えよう ～を求めよう
- 表現・処理を身につけさせたい → ～ができるようになるろう ～名人になるろう
- 知識・理解を身につけさせたい → ～を知ろう

b 系統表、ステップアップ問題集の活用

中学校第1学年「比例と反比例」における学習課題「比例の関係のグラフの特徴を知ろう」の導入段階では、小学校第6学年の問題（ステップアップ問題集より）を提示して既習事項の振り返りを行った。生徒は、小学校で学習したグラフとの関連や対応表の書き方、直線であることを思い出させることで、本時の学習内容を見通すことができたようである。

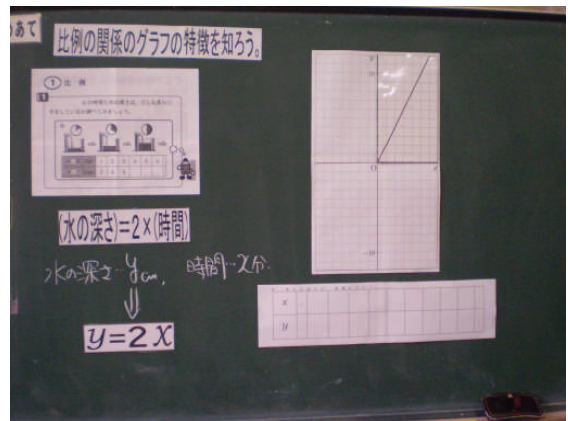


図2 【中学校第1学年「比例と反比例」の導入段階】

(イ) 展開段階～「課題解決への見通し」をもたせるための手立て

児童生徒に課題解決への見通しをもたせるためには、ノートなどの既習事項の活用や解決の糸口や方法の支援となるヒントカードを提示しながら、児童生徒の課題解決への見通しを支援していく必要がある。

○ 前時ノートの活用

小学校第6学年の「変化する2つの量を調べよう」では、ともなって変化する2つの量が比例しているかどうかを調べるために、前時のまとめを行い、解決の糸口を見つけさせた。

【前時でのまとめ】

- ・ 一方の値をもう一方の値でわると、いつもきまった数になるとき、2つの量は比例するという。
- ・ 一方の値が2倍、3倍…となると、もう一方の値も2倍、3倍…となったとき、2つの量は比例するといえる。

見通しをもたせるための支援

【本時での活用】（児童のノートより）

② 本数(本)	1	2	3	4	5	6
重さ(g)	8	16	24	32	40	48

(理由)

$8 \div 1 = 8$   
 $16 \div 2 = 8$   
 $24 \div 3 = 8$

もう一方の値が2倍3倍と変わったときにもう一方の値も2倍3倍と変わっているから比例している。  
 A. 比例している

一方の値をもう一方の値でわるといつもきまった数になるとき、2つの重さは比例しているから。

「以前学習したことが活用できる」という意識を児童にもたせておき、課題解決の際に、わからないときや解決方法が見いだせないときには、前時のノートや教科書を活用して考えるように支援したことで、子どもたちの課題解決への見通しを促すことができた。

(4) 終末段階～「今後の学習への見通し」をもたせるための手立て

児童生徒に今後の学習への見通しをもたせるためには、本時の学習内容のまとめをするだけでなく、児童生徒が新たな発見ができるような問題の提示が必要である。次学年ではどう変わっていくのか、どう活用されるのかを視覚的に理解させることで、本時の学習内容がより深まると考えた。

	本時のまとめ	方法・支援・手立て	今後の学習へ
小学校 第6学年	比例する関係を表すグラフは直線で、横軸と縦軸の交わる点を通る。	○次時に行う問題を提示 ○「原点」という言葉 ○第4象限まで拡張したグラフ	中学1年生の学習内容へのつながり
中学校 第1学年	比例のグラフは原点を通る直線である。	○次時での問題を提示 ○小学校とのグラフの比較 ○双曲線、放物線などの紹介	中学2、3年生の学習内容へのつながり

(5) 成果と課題

- 導入段階と終末段階において、単元系統表とステップアップ問題集を活用したことにより、基礎的な知識と技能の習得ができ、「見通し」への支援ができた。
- 「見通し」をもたせるための手立てを工夫したことで、児童生徒は、常に目的意識をもちながら学習に取り組むことができた。
- 展開段階での見通しをもたせる手立てや支援を、さらに研究していく必要がある。
- 児童生徒が見通しをもって学習している姿（めざす児童生徒像）をどう捉え、それをどのように評価していくのか、さらに研究を深めていく必要がある。

3 道徳研究班

道徳研究班では、今日の教育的課題やひゅうが学校教育プラン、日向市の児童生徒の実態を受け、道徳の時間において、自己の生き方や人間の生き方についての考えを深めさせることが、児童生徒の豊かな心を育成することにつながると考えた。その際、自己をしっかりと見つめさせ、本音で語り合うことが大切であると考え、本音を引き出すための道徳の時間の指導の工夫を中心とした、より実践的・具体的な研究を進めることとし、本主題を設定した。

(1) 研究主題及び副題

**豊かな心の育成を図る道徳の時間の在り方**  
～自己を見つめ、本音で語り合う指導の工夫を通して～

(2) 研究の仮説

道徳の時間において、ねらいに即した児童生徒の実態把握や読み物資料の分析を十分に行い、自己を見つめ、本音で語り合う学習指導を展開すれば、児童生徒は自己の生き方や人間の生き方についての考えを深め、豊かな心を育成できるであろう。

(3) 研究内容

- ア 各中学校における重点内容項目・重点目標の設定
- イ 道徳の時間におけるねらいに即した児童生徒の実態把握の方法



- ウ 読み物資料の分析の在り方及び資料分析を生かした板書の工夫
- エ 本音で語り合う指導の工夫
- オ 道徳的実践力につなげる終末の工夫

#### (4) 研究の実際

##### ア 各中学校における重点内容項目・重点目標の設定

各中学校区がそれぞれの実態に応じて、重点内容項目を設定している。そして学年間の系統性を考えた重点目標達成に向けて、指導方法の工夫や教材開発に小・中学校が連携して取り組んでいる。

##### イ 道徳の時間におけるねらいに即した児童生徒の実態把握の方法

道徳の時間において、児童生徒の自己を見つめさせ、本音で語り合うためには、児童生徒の実態を十分に把握し、それを授業に生かすことが大切である。本研究では、「道徳の時間についての意識調査」「指導内容項目についての調査」という2つの観点から質問紙法の方法で児童生徒の実態把握を行った。また、実態調査については、次のように学習指導過程の中で生かすようにした。

段 階	実態調査の生かし方
導 入	学習前の価値観を確認する。
展開前段	登場人物の心情を想像したり共感したりすることができるような発問や指導の手立てに生かす。
展開後段	自分の生活を振り返らせ、今までの自分の考えと比較しながら、自分の考えを再認識したり深めたりする。

##### ウ 読み物資料の分析の在り方及び資料分析を生かした板書の工夫

###### (ア) 読み物資料の分析の在り方

道徳の時間において、読み物資料の「どの内容」を、指導過程の「どの段階」に位置付けて、「どんな方法」で使うのが適切かを明らかにしていく必要がある。そこで、下記の手順で資料分析を行った。

- ① 資料のあらすじ、場面、状況、事実等の推移をとらえる。
- ② 場面ごとの登場人物の心の動き、心の中をキーワードとなる表現などを見つけ読みとる。(必ずしも文章の中に表現されているとは限らない)
- ③ 登場人物(主人公)の行為やその奥にある心の動きに含まれている価値を押さえる。
- ④ 資料に含まれている価値は一つではないので、ねらいとする道徳的価値に迫るためには、資料のどこを、どう生かせばよいか検討する。
- ⑤ 児童の実態を踏まえながら、発問の意図を確認し、発問を構成する。

###### (イ) 資料分析を生かした板書の工夫

効果的な板書を行うためには、資料分析をもとに、児童生徒の心の動きを予想して、綿密な板書計画を立てることが大切であり、次のようなことに留意する必要がある。

- a 資料のあらすじや登場人物の人間関係など、場面状況が把握できるようにする。
- b 児童生徒の思考の助けとなるような構造的な板書を行う。
- c 中心場面・中心課題が明らかになるようにする。



- d 色チョーク、場面絵、短冊、囲み、矢印などを活用し、視覚に訴える。
- e 児童生徒の発言を、短い言葉でまとめる。
- f 書く位置や書くタイミングを工夫する。

エ 本音で語り合う指導の工夫

(ア) 資料提示の工夫

読み物資料という間接的な場面を通じ、児童生徒が自分の考え方を主人公の気持ちに置き換えて考え、本音で語らせるために次のような工夫を行った。

a 導入からねらいとする価値への方向付け

体験活動やアンケート結果などを活用しながら、本時学習に対する目的を明確にし、読み物資料へとつなげられるようにした。

b 場面の焦点化及び板書への活用

本時のねらいとする価値を明確にするため、複数のねらいが含まれた資料の中から、必要な場面のみを紙芝居形式で提示し、提示した紙芝居を板書に活用することで、場面の把握が容易になり、ねらいとする価値を明確にすることができるようにした。

(イ) 発問の工夫

発問を工夫することにより、児童の問題意識や疑問が生み出され、多様な感じ方や考え方が引き出される。児童生徒が自己を見つめ、本音で語り合う道徳の時間の工夫を行う上で、発問は大変重要である。そこで、児童生徒がねらいとする価値に迫るため、発問を以下のように分類した。なお発問の具体例については、第6学年「レジにて」の内容である。

類型	内容	具体例
読み取り 発問	行為や行動の進行に沿って事実を確かめ合う発問	「わたしはどのような気持ちで男の人を見ていたのでしょうか。」
掘り起こし 発問	行為や行動の奥にあるかくれた部分をイメージ化してあぶり出させるための発問	「レジで男の人に割り込みをされたのに、定期券を落としたことを教えたのは、なぜでしょう。」
中心発問	本時のねらいとする価値を引き出す発問	「男の人が落とし物をしたことに気付いたとき、わたしはどうしたでしょう。」
補助発問	発問を分かりやすくしたり、児童の発言や考え方を整理したり、補充したりする発問	「落としたことを教えなかったら、この後どうなったでしょう。」
ゆさぶり 発問	行為や行動に対して、価値選択を問いかける発問	「親切にしたけど、お礼を言ってもらえませんでした。親切にしなくてもよかったのではないですか。」
実践意欲 を高める 発問	自覚した道徳的価値を自分のものとして発展させ、実践意欲を高める発問	「今日の学習で学んだことや気付いたこと、これからの生活に生かしていきたいことはありますか。」

(ウ) 話合いの工夫

中心発問においては、個人思考から小グループでの話合い、そして全体での話合いと

多様な学習形態で行い、児童生徒の本音を引き出せるようにした。

また、展開後段では、これまでの自分の生活を振り返り、その経験について、「できたか」「できなかったか」の項目別に色分けした短冊に書かせ、その行為をした「相手」（家族、学校の人、地域の人、知らない人）によって分類し、黒板に掲示することにより、お互いの経験を比較しながら話し合いができるようにした。

(エ) 書く活動の工夫

読み物資料の場面絵にある人物の表情を隠したワークシートを用意し、そのワークシートに人物の表情やその時の行動、気持ちを書かせることにより、登場人物の行動に自分自身を投影し、自分の経験や体験を想起させながら心情を考えさせることができるようにした。

(オ) 表現活動の工夫

展開前段において、動作化や役割演技を行わせることにより、登場人物の気持ちを想像したり共感したりすることができるようにした。

オ 道徳的実践力につなげる終末の工夫

終末において、本時の学習を振り返り、学んだことや気付いたこと、これからの自己の生き方につながっていく発展的な思いや課題等、ワークシートに書かせるようにした。また、児童の作文や教師（担任、他教師、中学校の教師）の説話を聞かせ、余韻をもたせて終わらせることで、児童生徒の実践意欲が高められるようにした。

## (5) 成果と課題

- ねらいに即した実態把握や読み物資料の分析を十分に行ったことで、ねらいとする価値を明確にし、より効果的な指導を行うことができた。
- 様々な学習指導の工夫を行ったことにより、自己を見つめ、自己の生き方について考えさせることができ、児童生徒の本音を引き出し、道徳的実践力を高めることができた。
- 話し合う内容を焦点化し、児童生徒の本音を引き出す方法をさらに研究していく必要がある。
- 児童生徒の道徳的実践力を高めるために、体験活動と道徳の時間との関連を明らかにする必要がある。

## ○ 引用・参考文献

小学校学習指導要領（文部科学省） 中学校学習指導要領（文部科学省）  
小学校学習指導要領解説国語編（文部科学省） 中学校学習指導要領解説国語編（文部科学省）  
小学校学習指導要領解説算数編（文部科学省） 中学校学習指導要領解説数学編（文部科学省）  
小学校学習指導要領解説道徳編（文部科学省） 中学校学習指導要領解説道徳編（文部科学省）

## ○ 研究同人

所長	北村 秀秋（日向市教育長）	研究員	上野 絵美（平岩小中学校教諭）
副所長	米谷 眞弘（学校教育課長）	研究員	甲斐 政憲（大王谷学園初等部教諭）
在所校長	深城 哲男（日知屋小学校長）	研究員	増田 邦明（富島中学校教諭）
研究班長	山田 浩明（日知屋東小学校教頭）	研究員	高木 道郎（財光寺中学校教諭）
研究班長	湯浅 正博（美々津小学校教頭）	研究員	加塩 勉（日知屋小学校教諭）
研究班長	永野 悦子（寺迫小学校教頭）	研究員	工藤 紗千（日知屋東小学校教諭）
研究員	森崎 陽介（富高小学校教諭）	研究員	日高 克哉（財光寺小学校教諭）
研究員	城後 誠（塩見小学校教諭）	研究員	竹下 昭彦（日向中学校教諭）
研究員	長友 晃一（財光寺南小学校教諭）	事務局	後藤 克文（学校教育課長補佐）
研究員	青木 雅美（坪谷中学校教諭）	事務局	前田 洋（学校教育課教育指導係長）
研究員	井手上和代（富高小学校教諭）	事務局	畑中 研二（学校教育課指導主事）